

平成25年度6月朝礼 「努力できるという才能」

H25.6.3

みなさん、「才能」という言葉を知っていますね。才能とはどんなことをいうのでしょうか。辞書で見ると「物事をうまくなしとげるすぐれた能力」とありました。

みんなの友だちの中には、才能に恵まれているなど感じる人がいるのではないかでしょうか。例えば、A君は走ることがとっても速い、B君は野球でとても良いバッティングをする、Cさんはバレーでものすごいアタックを打つことができる、また、Dさんは美術の絵がとてもうまい、Eさんは合唱がとても上手……など

逆に、自分は才能がないなあと感じることもあるかもしれません。先生自身は楽器を弾くことができません、また、社会の地理の地名を覚えるのがとても苦手でした。だから楽器が弾ける人、暗記が得意な人は才能があって良いなと感じたことがよくありました。

今日はそんな才能の話をしたいと思います。

みなさんは松井秀喜さんを知っていますか。野球が得意でない人も知っている人が多いのではないでしょうか。今年の5月5日に長嶋茂雄さんとともに、国民栄誉賞を受賞された人です。テレビでも放映されたので、連休中に見た人も多かったかもしれません。

松井選手は、石川県の星陵高校の出身で、幼少の頃は柔道や相撲でも力を発揮したようです。高校時代から大変な有名な選手で、高校生で何本もホームランを打つような実力の持ち主でした。そして、つけられたニックネームが怪獣の「ゴジラ」でした。その彼が夏の甲子園に出場したときに、相手チームが彼に打たれないようにと「5連続の敬遠」を行ったということで話題となりました。敬遠とは打たせないようにフォアボールを与えることです。

プロ野球選手になってからもジャイアンツで活躍し、大リーグ選手にもなりました。大リーグでは、ニューヨークヤンキースという有名なチームでワールドシリーズ優勝に貢献して、最も優れた選手に与えられるMVPを獲得しました。

そんな彼ですが、大変な人格者で、決しておごることがなく、謙虚であるということもよく知られています。

この松井秀喜さんの座右の銘が「○○できるということが才能」というものだそうです。○○に入る言葉は何だと思いますか。実は『努力』という言葉が入ります。読んでみると「努力できるということが才能」となります。

画家で陶芸家の畠伊之助(はざまいのすけ)さんという方の言葉で、松井さんの父親がその言葉を聞き、子どものころの松井さんにあげたそうです。その後、松井さんはこの言葉をずっと大事にしてきたそうです。そして、この言葉を励みにして、毎日欠かさず野球の素振りをして大選手になったのです。

さて、松井さんの大切にしていた「努力できることが才能である」という言葉ですが、努力ができることが才能なら、才能は特別なものではない、みんな「努力できる」という才能」をもっているということになると思います。

実は、この言葉をよく読んだときに、少し言葉がかくされていると思います。それは、「続けて」という言葉です。努力できるという才能を發揮できるかどうか、鍵になるのは、「地道に努力を継続できるか」です。松井選手があの有名な野球選手になるために、毎日素振りを欠かさなかったように、努力しようと決めたことを毎日、少しづつ、継続していくことができるか、これが大切です。先ほどの言葉に少し言葉を付け加えて、「(続けて)努力できることが才能である」とするとわかりやすい気がします。

2,3年生には昨年、「積小為大」という言葉を紹介しました。小さなことの積み上げが大きな成功につながるということでした。松井選手の大切にしていた言葉につながる部分があります。

第3ステージは「活気みなぎる学習と部活のステージ」です。ぜひ、学習において、部活動において、「努力できる」という才能」をみんなも発揮してほしいと思います。その才能を発揮するポイントは努力を「少しづつ、毎日、続けて」いけるかどうかですね。

みなさんの少しづつの頑張りを期待しています。